

発刊のことば^(※1)馬城会長 中第22回卒 今野源八郎^(※2)

このたび、80年にわたる母校の発達史を皆様の協力でまとめられたことは、誠に意義深く、喜ばしいことである。由緒ある母校の80年史は、恩師、先輩、生徒、父兄を含む関係者の懐かしい学校生活、子弟教育の思い出の記録となろう。また、それは、今後、母校に学びあるいは関心をもたれる人々に学校の歴史的伝統を語るのに役立つと思われる。

昨今、わが国の学校教育、特に高校教育には問題が多く、「これでいいのか」という疑問がしばしば提起されている。それは、戦後の学校教育の制度・内容のあり方にかかわる問題である。これは、「どういう学校教育で、多くの日本人を欧米人以上の人柄・見識・実力をもつ人間に創りあげられるか？」という根本問題になろう。それは、今後の中等・高等教育だけでなく、家庭教育・社会教育の内容いかにによる。それでは、今後、わが国が長く繁栄し、国民が幸福な生活を享受していくために、高校教育の内容はどうあるべきであろうか？ また、そこで、生徒諸君が自ら積極的に、自己を知育・徳育・体育の面で開発していくにはどうすればいいのか？多くの教育関係者、父兄、そして高校生諸君が、このような問題について考えられ、あるいは悩みをもっていると思われる。

われわれは、未来を考えようとする時、過去の長い歴史と実績から「歴史の教訓」を学びとることができよう。この80年史は、過去の長い間、恩師、生徒、父兄、後援者達がいかに協力し、当校を創設し、経営してきたか、また、人材を養成してきたかという貴重な歴史としての価値をもつ。この意味で、ここに書かれた歴史は、また、今後、母校の未来を考え計画する人々に、母校の成長の歴史的特徴を語るものとして役立つことを期待したい。

さて、80年の相中・相高の歩みは、また、わが国の教育文化、社会経済・政治の近代化の歩みとともに進んでいる。明治政府は、開国後、自由主義・民主主義社会建設に当って、最重点政策として「日本人の近代化（モダリゼーション）」教育をとりあげ、義務教育・中等教育・高等教育・大学教育制度を創設した。このような政策の下で、県が郷土の人々と協力し、80年前すなわち明治31年（1898年）に、相馬中学を開設したのである。それは、京都帝国大学（創設明治30年）の翌年というから相当早い。しかも、輝ける歴史的伝統の相馬城下町を選んで開設されたことは意義深い。その後、相馬中学校は、郷土、県民の支援の下に、関係者、生徒一体の努力で、いかにして県下の名門校としての実績をあげてきたか。その間の歴史は、本文に詳しく述べられているであろう。

相馬中学、相馬高校は、相双地域を中心とする多くの子弟の教育に、どれだけ大きく役立ってきたことであろうか。貧しく不便であった明治・大正・昭和初期の日本、特に浜通りに、もし当校が立地していなかったとしたら、われわれの教育の機会はどうなっていたであろうか。こう考えてみれば、当校の地域社会の人材養成、文化教育に対する貢献が理解されるはずである。

私自身、当中学で、日本文学、数学に加えて、初めて広い東洋・西洋を含む地理と歴史を学び、また、英語と英米人のものの考え方、自然科学の知識等を、学識豊かな諸恩師から学んだ。それは、人生の歩み、思想に大きな影響を及ぼしている。また、放課後の寮や、陸上競技部の悪童仲間とのたのしい生活も忘れえない。おそらく、1万人の卒業生の大多数も、感謝をこめて、少年期・青年期の同じような「心に生きる学校」の思い出にひたっていることであろう。そして、この80年史は、このような思い出を、さらにフレッシュなものにしてくれるにちがいない。

最後に、郷土の母校が、良き歴史的伝統をふまえながら、西暦2000年へ向って、新しい発展の歴史のページを描いていかれることを祈念してやまない。

(※1) 創立80周年記念誌 『相中・相高八十年』(1978(昭和53)年5月7日発行)より。

(※2) 八幡出身。

(転記&※脚注 村山)